

マイワシ1キロ5,000円也！！

—マイワシ流し網漁1億円産業への道—

相馬双葉漁業協同組合新地支所青壮年部

小野 智 英

1. 地域の概要

私たちが住んでいる新地町は、福島県浜通りの最北部に位置し、宮城県と県境を接している町である（図1）。前浜は遠浅の砂浜が続き、カレイ、ヒラメの好漁場となっている。

2. 漁業の概要

相馬双葉漁業協同組合新地支所は、組合員数77名、51隻の漁船が所属している。古くから漁業が行われてきた地区であり、特にさし網漁の歴史は古く、この漁法によって漁業が発展してきた。また、前浜で獲れるイシガレイは「釣師ガレイ」と呼ばれ珍重されてきた。

現在は、カレイ類を主な対象とした固定式さし網漁を主体に、コウナゴやメロウド、サヨリなどを対象とした船曳網漁、タコ・マアナゴのカゴ漁などが盛んで、平成18年の年間水揚金額は4億5,000万円、属地水揚げは3億3,000万円であった。近年は魚価の低迷などにより減少が続いている。

3. 研究グループの組織と運営

新地支所青壮年部は、部長、副部長を含めて21名で構成され、新地町主催のイベントでは、海産物の販売や漁船パレードなどに参加し、魚食普及や地域活動に参加している。これまでに、ホタテガイの養殖試験やクルマエビの源式網操業試験、アワビ漁場造成試験などに取り組んできた。特に、アワビ漁場造成に併せて取り組んだ磯根漁業は、その後新規漁業として定着している。

4. 実践活動取組課題選定の動機

新地支所は、固定式さし網漁によるカレイ類を中心に、船曳網漁によりコウナゴやメロウド、サヨリ、カゴ漁によりタコ、マアナゴなどを水揚げしている。しかし、近年の底魚資源の悪化や、隣県との入り会い問題などによる漁場の減少、不況による魚価の低迷などから水揚金額は年々減少傾向にあった。特に、3月から5月にかけて続くコウナゴ、メロウドの船曳網漁が終わり、カレイさし網などの他漁業へ転換する夏期には水揚金額の減少

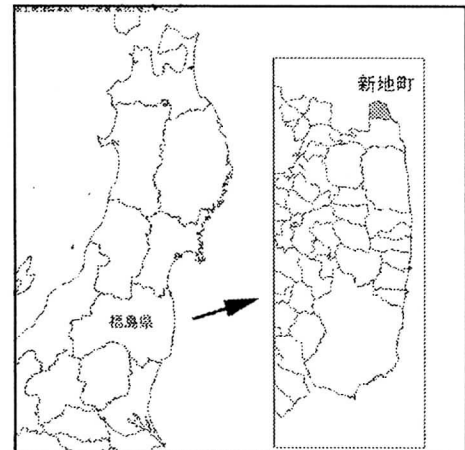


図1 新地町の位置

が大きく、新たな漁業はないかと模索していた。その時期に、夏期に他県から来たイカ釣り船が大型のマイワシをわずかずつだが水揚げしていた。そこで、この魚を私達が得意とするさし網でとる方法はないかと検討を始めた。

5. 実践活動状況及び成果

初めにマイワシ漁に取り組んだのは平成16年である。他県のイカ釣り船から、集魚灯の明かりにマイワシが集まってくるとの情報を得て、同様の装備を持つ2隻が取り組んだ。船のまわりに集まる魚を漁獲するので漁具は小型のものにした。当初は目合2寸のメバル網を使ったが、魚群の動きや魚の大きさから判断し、目合い8節、幅100掛けの1反の網を2つあるいは3つに切り分けて、長さ20~25間として本格的な漁を開始した(図2)。その後も条件に応じて目合い、幅、長さなどを変えることで水揚げの向上を図っている。

集魚灯に集まった魚群は船のまわりの表層を泳ぎ回ることがわかり、これを効率よく漁獲するために、網は船につないで流し、魚のかかり具合を目で見ながら短時間で投揚網を繰り返す方法を取った。また、網を複数用意し、網にかかった魚を外している間も絶えず網を海中に流し、さらに、船も網とともに潮に流すことで、魚を獲りながらも広範囲で操業できるようにした。このような工夫によって、集めた魚群を非常に効率よく漁獲することができるようになった(図3)。なお、水揚量を左右する最も重要な条件は漁場の探索であり、前日までの漁模様や水温などの条件から選定して魚探反応で魚群を確認するが、潮流の影響が大きいようである。

このような方法によって、流し網を使用してもマイワシを生きたまま漁獲することが可能となった。そこで、次に、高鮮度を維持したまま市場に出荷する方法を検討した。船上での鮮度保持の手法としては、魚の大きさに応じて目合の異なる網を使い、網を揚げた後は網目を切って魚を網から外すことで魚体にキズが付くことを防ぐこと、網から外した後すぐに冷海水に漬けて締め、鮮度を維持すること、魚体には極力触れないこと、さらに、輸送中のスレを防ぐため容器に仕切り板を入れることに取り組んだ。市場への出荷方法としては、冷海水に氷を入れた発泡箱に魚を詰めて出荷する方法を採用した(図4)。

このような高鮮度出荷の取り組みの結果、私たちの水揚げしたマイワシは流通業者にも認められ、一般に流通しているまき網等の水揚物との差別化を図ることができた。平成16年の相馬原釜市場での単価は1kg当たり500円程度だったが、平成17年には同市場で本格的な入札が開始され、1kg当たり3,500円の高値を付けた。さらに、平成18年には魚体を大きさ別に揃えて箱詰めする銘柄別の出荷に取り組んだ結果、1箱40尾入りの箱詰めのものに1kg当たり5,600円の高値が付くまでになった。これは、マイワシ1尾に500円の値段が付いたことになる(図5)。

このような状況のなか、平成17年には支所内と近隣の磯部支所の所属船が着業し、相馬原釜支所でも技術の導入を図る船も現れた。この年の相馬原釜市場への水揚量は1トン、金額は180万円程度(1,581円/kg)だったが、平成18年には3支所内でさらに技術が普及したほか、さらに南部の鹿島支所、請戸支所へも拡大し、相馬双葉地区全体で約40隻が操業するまでになった(図6)。この年の相馬原釜市場への水揚量は57トンと大幅に増加し、かつ、全ての着業船が箱詰め出荷に取り組んだことで高価格が維持され、水揚金額は1億1,000万円(1,984円/kg)を超えるまでになった(図7)。

新地支所では14隻が着業し、18トン、3,000万円あまりを水揚げすることができ、これまで水揚金額が低迷していた時期の新たな取り組みにより、漁業経営の向上に大きな効果があった（図8）。県の沿岸漁業において水揚金額が1億円を超える魚種は多くはない。しかも漁期が3カ月足らずの漁業であり、私たちが閑漁期対策を模索する中で導入したマイワシ流し網漁が地域漁業に与えた影響は非常に大きいと考える。

6. 波及効果

新地支所所属船が導入したマイワシ流し網漁は、新たな設備投資や漁具の導入が必要ないことから、支所内はもちろん、近隣の支所の若い漁業者を中心に、その技術は普及していった。コウナゴ・メロウド漁を終えて他漁法へ転換していく6月以降の新たな漁業として地域に受け入れられ、漁業経営の向上にも繋がった。また、高鮮度出荷による差別化によって、少ない資源からでも大きな利益が得られることを理解できたことはとても有意義だった。さらに、新たな資源の利用によって、資源の多面的な利用につながり、過度になりがちなカレイ類等の底魚資源への漁獲圧力の削減にも効果があると考えられる。

7. 問題点と今後の対策

導入後、急速に普及拡大したマイワシ流し網漁は、平成19年には89トンとさらに水揚量を伸ばした。しかし、単価が低迷し、水揚金額は8,400万円（951円/kg）にとどまった（表1）。これには、大量集中水揚げが続いたことや、前年に高値で取引された大型のマイワシが減少して水揚げサイズが小型化したためである。新地支所では休漁などして対応したが、状況の改善には至らなかった。

今後は、この漁法を定着、発展させるためにも、マイワシ資源を利用する漁業者が水揚げサイズや水揚げ方法を検討するなどして、貴重な地域資源を有効に利用し、漁業経営の向上に繋げていきたい。

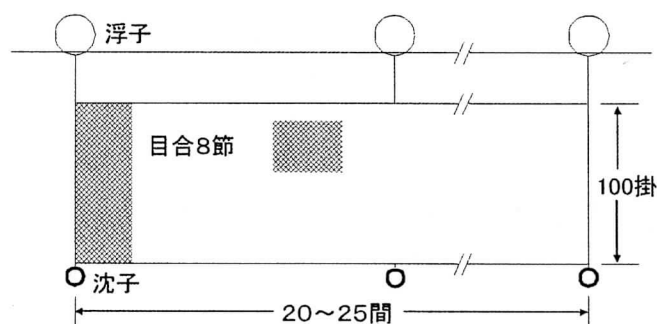


図2 漁具の構造（取り組み開始時）

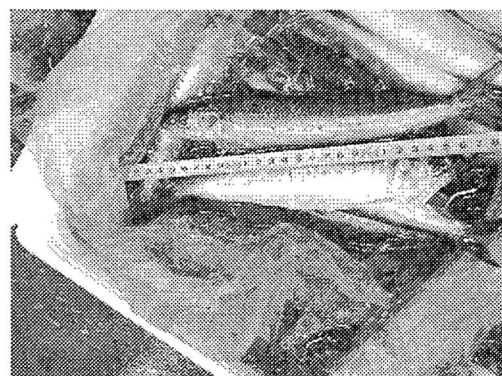


図3 水揚げした大型のマイワシ



図4 箱詰め出荷の取り組み(市場)

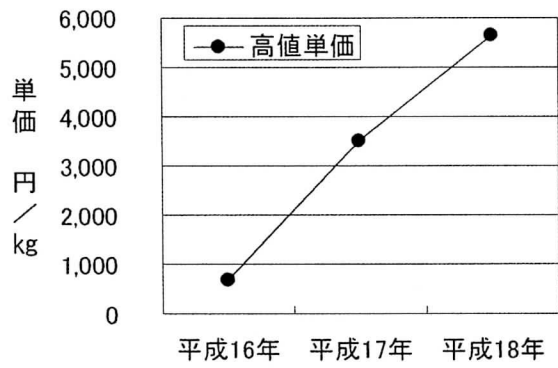


図5 市場での単価の推移(流し網)

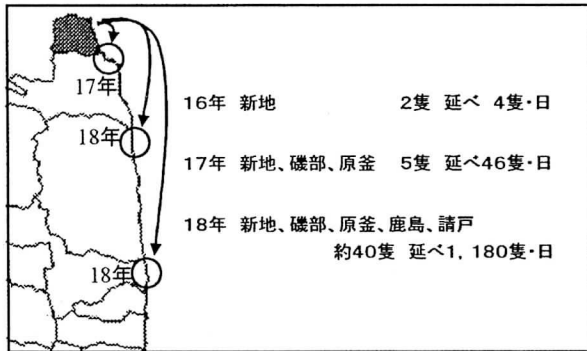


図6 近隣地区への技術の波及

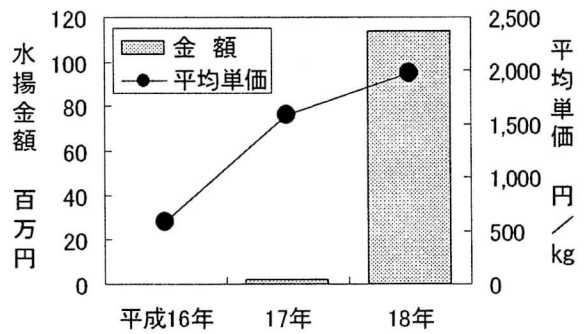


図7 マイワシ水揚げ状況(流し網)

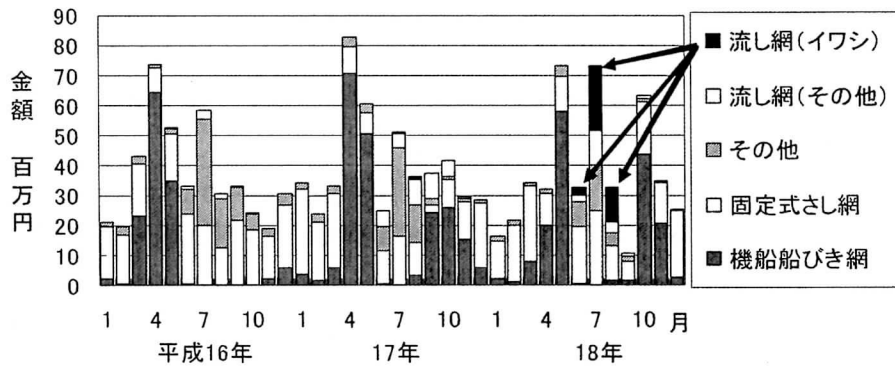


図8 新地支所の月別水揚げ金額の変化

表1 流し網によるマイワシ水揚げ状況(相馬原釜市場)

	水揚げ日数 (日)	数量 (kg)	金額 (千円)	平均単価 (円/kg)	高値単価 (円/kg)
平成16年	3	45	26	581	680
平成17年	12	1,143	1,807	1,581	3,500
平成18年	56	57,467	114,012	1,984	5,633
平成19年	69	83,034	79,006	951	4,667